在外研究報告：イタリア文化と情報教育

小池　榮一

はじめに

情報化社会を迎え21世紀に生きる人間形成のために世界各国は情報教育に力を入れている。そのために多種多様な教育改革が行われている。

日本においても文部科学省による新学習指導要領の実施は2002年4月からスタートし，ここから「情報教育」が本格化することになる。国内でも政府主導によるIT革命が実施され，各所でコンピュータ活用が強調されている。何事も一度に急遽すべてを成し遂げることはできないが，まず教育の分野，特に学校教育において確実な情報教育を実践していくことが重要な課題となってくる。

2002年4月から実践される新学習指導要領では，国際化・情報化・科学技術教育の推進等が21世紀の世界の潮流に適合するような目的をもって実践されるようになっている。

特に教科の枠を超えた「総合的な学習」の実践では今後の教育の在り方を決定づけることになると思われる。総合的な学習に関しては時間数の軽減に伴い学力低下を招く等々の諸批判が少なくないが，何はともあれ今後の日本教育の方向性を示すことになる。

新学習指導要領を教育実践するためには，新視点にたつ教員養成のあり方が大きく関与してくる。今日，少子化等の影響により教員採用が激減して，魅力も減少し教員養成も軽視されるようになっている。加えて不登校や問題児の急増及び家庭教育の消失等により教職への魅力が半減しているのが現況である。この状況が世界的なものとは思えないが，教員養成において情報教育の在り方が急務になってくることは間違いない。

情報教育に関してこれまで日本の現状を起点にして米・英各国の実態を比較考察してきたが，今回はイタリアに在外出張することが可能になった。そこでメインテーマに関する比較考察を加え，日本に於ける教員養成のありかたにヒントを得ることが本論の目的である。教育条件を規定する諸々の背景を探りながらテーマを考察していく。

I. イタリアという国

「イタリア」という国家が誕生したのは1861年であるが，2000年以上前からヨーロッパ文化の中心であったローマ帝国は巨大な軍事国家であった。帝国崩壊後にカソリック教会の総本山がローマに置かれ，中世になるやベネチヤ・フィレンツェ・ピザ・ジェノバ等の独立した都市国家が次々と勃興し，ルネッサンスとして開花していった。豊かな学問や目を見張る芸術が一挙に花開き西洋文化の根幹に多大の影響を与えた。このためか政治や経済は国家統一体としてはまとまらず国情不安が常に存在して動乱は19世紀初頭まで続いた。やっとガルバルディ，カブール等の先導したナショナリスト運動がきっかけとなって1861年イタリア王国が誕生した。そしてエマニエール2世が初代国王になった。

紀元前より王制や共和制を経て帝政ローマと

なって繁栄を謳歌したローマも 395 年に東西ローマに分裂し，のち 476 年西ローマ帝国崩壊後は東ゴート・東ローマ帝国・ランゴバルドに支配され，962 年から神聖ローマ帝国の下におかれた。この頃から地中海貿易が活発化し，さらにジェノバ，ピザも加わって十字軍を支援して巨大な富を得るようになっていった。内陸のミラノ・シエナ・フィレンツェ等の商業都市も発達し 11 世紀後半にそれらは自治権を獲得しコムーネ（自由都市）を形成し都市国家として発展していった。15 世紀末から 200 年にわたってフランスやスペインに侵攻され困惑され続け，1815 年オーストリアの支配下になる。ここで民族主義が高揚しイタリア統一運動〈リソルジメント〉が起こってきた。国王エマニエル 2 世がオーストリアに宣戦布告し中部イタリアを併合し，同時にその間に急進派のガルバルディがシチリアやナポリを占有しエマニエル国王に協力したのでイタリア王国が統一され誕生したのである。その後ベネチヤを併合しローマからフランスを撤退させ，1871 年にローマがイタリア王国の首都となった。20 世紀に入り 1922 年ファシストのムッソリーニが政権を樹立し対外進出を図り日独伊三国同盟が結ばれた。第二次大戦の 1943 年の敗戦でイタリアは無条件降伏し，ムッソリーニは銃殺された。第二次大戦で海外の植民地を失い経済は極度に悪化する中 1890 年代半ばにやや後退するもののユーロ通貨統一の一翼を担い今日に至っている。

現在の政体は共和制，人口約 5740 万人，面積は約 30 万1268 km〈国土の八割近くが山岳地帯と丘陵地帯〉，地中海のほぼ中央に突出した長靴型の半島でシチリアとサルデーニア等の島々から成っている。言語はイタリア語に統一されているが地域によりフランス語やドイツ語が使われている。東はアドニア海，西はリグーリア海とティレニア海，南は地中海とイオニア海に囲まれている。まぶしい太陽が照りつけるオリーブとブドウが豊かに実り（世界第一の産出国），歴史的な名所旧跡や風光明媚な多くの観光地があり，観光資源に恵まれ世界有数の国際的旅行訪問国である。そのキャッチフレーズはオーソレ・ミオ太陽の国，アモーレ恋の国，マンジャーレ食の国，カンターレ歌の国イタリアなのである。さらに，生きた多くの博物館，ファッションやデザイン・絵画の世界でも多くの視線を集める国，数えれば枚挙に暇がないほど多くの魅力を持つ国である。

II. イタリアの国民性

イタリア人は情熱的で社交的であるといわれている。地中海の気候やローマ帝国崩壊後 1400 年もの間統一されず都市国家に分裂したために上記のような国民性が形成されてきたと思われる。ミラノは経済都市であることを主張し，フィレンツエ・ボローニア・パドウバが学問の中心であることを自負し，トリノ・ジェノバ・ナポリ・パレルモが工業都市を主張している。夫々の都市が独自に同郷意識を主張してやまない。イタリア語でカンパニリズモ Canpanilismo と言う。わが国で言えば県人会・学閥・財閥等々と同種のものである。出身別が方言にあらわれ，北部・中部南部・島嶼地区がわかってしまう。一般的にイタリア人は概して，おしゃべり好きでスタイルにこだわり短気ながらも長い苦難を我慢する忍耐強さを兼ね備えている。辛辣な皮肉屋であるとともに情熱的で暖かく寛大である。女性に親切なイタリアの男性は外国人女性に誤解され易い。カトリックの総本山のバチカンがあるだけにイタリア人の日常生活は常に教会と深いかかわりをもっている。ローマ法王を長とする世界一小さな独立国バチカン市国は，サンピエトロ寺院を中心にしたカトリックの総本山である。今日でも半数近くが毎日曜教会に行っている。月の最終日曜日にあるバチカンの法王のミサに家族で出かけるほど絆が強い。また，車でグルメの旅に行くほど自動車好きで保有台数は世界のトップにある。

教育制度は 6 才で入学する 5 年制の小学校と

3年制の中学校の8年間が義務教育である。義務教育後に大学進学のための高等学校（リチエオ）と各種の職業技術学校がある。大学は一部を除き無試験で入学できる代わり卒業は非常に難しい。大学進学率は高校卒の2割であり，約6割が女子であるという。男子の多くは職業技術学校に進学し就職するという。教育は何よりも人格形成にかかわる社会発展のための基底をなすものである。特に義務教育の期間は人間の一生を左右する極めて重要な教育期間にある。各国で義務教育に力を入れている意味が理解できる。また義務教育を担当する教員養成も相応して重要と言うことになる。

新世紀に入り世界各国は予想もできないほど社会変革が迫られている。米英を先頭にヨーロッパ各国は特に情報革命の渦に巻き込まれ，夫々に成果を上げ，同時に幾多の問題を抱え込んでいるのが現状である。

III. イタリア教育の背景

日本に知られている有名なイタリアの文化人と言えば14世紀ルネッサンスの先駆者であり『神曲』を著わしたダンテ〈1265～1321〉や，『デカメロン』の著者ボッカチオ〈1313～1375〉等がいる。音楽面ではロマン派時代に活躍したヴァイオリニストのパガニーニ〈1762～1840〉，『ウイリアム・テル』の作曲家ロッシーニ〈1792～1868〉，『椿姫』『アイーダ』を作曲したヴェルディ〈1813～1901〉，あるいはプッチーニ〈1858～1924〉等がいる。

しかし我が国に知られている芸術家といえば大方は絵画や建築家である。カラバッジオ〈1573～1610〉，ボッティチエッリ〈1445～1510〉，ラファエロ〈1483～1520〉等の画家と彫刻建築のベルニーニ〈1598～1680〉，彫刻・絵画・建築家のミケランジェロ〈1475～1564〉，レオナルド・ダ・ビンチ〈1452～1519〉等がいる。ベネチヤ・フィレンツエ等のルネッサンス発祥の土地から花が開いたイタリア芸術は人間の生活にも多大の影響を与えた。

ルネッサンス以後の約200年はフランスを始めとする他国の侵略や戦乱の中におかれる。そしてようやく1861年イタリア統一がなされたのであった。

日本によく紹介されている教育者はマリア・モンテッソリー〈1870～1952〉である。ローマ近郊に生まれ，ローマ大学医学部卒後，同大学付属精神病院助手として勤務。精神薄弱児研究を続け国立異常児学校長となり，後ローマ大学講師。1907年にローマに『児童の家』を開設し「モンテッソリー法」を実践し成果を上げた。この教育思想は自由主義にたち，感覚から概念へ発展させる基礎的理論を確立した。モンテッソリー法は実生活のトレーニング，感覚，情操教育，基礎的知識の学習を重視した。感覚訓練では注意力や判断力の訓練を実施し言語と運動感覚器官の統一をはかろうとした。また基本的かつ初歩的な学問の学習では，例えば模倣したり，カードを使ったりして学んでいくというような方法を用いた。一歩一歩細かく確実に学習させるやり方は約150年後にアメリカの心理学者B・Fスキナーによって開発されたプログラム学習と類似するところがあった。

モンテッソリー法は児童研究を科学的に行うことを強調した。彼女の設立した「児童の家」は自由・環境・感覚教育が基本原理で「家」の施設の高度利用により筋肉運動を盛んにし，又各種の遊具を使って感覚作用を訓練していく。やや知識を重視する傾向が強いが，これらの思想は世界にモンテッソリー運動として広がっていったのである。

このモンテッソリーの「児童の家」はもともとローマ郊外の貧民街の保育所で興こり，1907年1月にローマの聖ロレッオ街に設けられた。この実践は，やがてスエーデンの教育思想家エレン・ケイ〈1849～1916〉の「20世紀は児童の世紀」というスローガンのもとに世界の児童中心主義の考え方と呼応するものであった。これはルソーの説を受けた極端な自由教育論である。

児童の生活や経験を重視し，それに適した計画や経営をはかる児童中心学校も現れ，新教育運動としてアメリカの進歩主義運動がデューイ・スクール等で始まった。伝統的な苔と怒声の教育から転じて児童の本性から生じる興味・要求に即して教育しようとする考え方が児童中心主義である。これはルソー・モンテッソリー・エレンケイ・デューイと続いて教育実践された思想である。20 世紀初頭に展開されたドイツの「児童から」Vom Kinde Aus の運動が自由，自治，自発活動，興味，経験，創造的活動として実践されたのである。日本でも「児童の村小学校」が大正 13 年〈1924〉に東京の池袋で野口援太郎によって創立されたが，これも家庭式の小寄宿舎制による自治自学主義の徹底した自由教育であった。

モンテッソリーの先輩のアガッツィがローマですでに幼児教育の実践をしていたことも特記すべきことである。

IV. イタリアの教育改革

イタリア文部省 Ministero Pubblica Istruzione 発行の『進む改革—サイクルの再編』ILORDINO DEI CICLI によれば，1997 年 3 月より学校教育財政の独立化に伴って学校改革が進められることになった。学校制度の再編が 2000 年 2 月の法律第 30 号によって国会で可決され 9 月から完全実施され始めた。この法律は文部省の財政健全化を広範囲に計画化する中で学校教育制度の漸新的改編を企画することである。この中で「自由な道」を示すことが目的である。学校は再生・再編への道を歩きはじめ段階的推移を経て 2012 年に完了ということが，2000 年 2 月の法律第 30 号第 6 条に明示されている。

このことで時代変化に即応する教育改革への要求が満たされることとなった。教育への要求とは義務教育段階を統合して再編し，授業・学級経営等の総体の質的向上をさらにレベルアップし，あくまで児童・生徒の学力向上を目指すことにある。新しい教育制度の確立とは児童・生徒の学習の保証と学力の向上を目指ことである。具体的には 3 歳より 6 歳までの幼年学校を任意ながらも確立し，小学校で基礎学力を確実につけさせようとすること（6～13 歳の第 1 サイクル），そして次段階の中学校（13～18 の第 2 サイクル）を確立していくことである。イタリアの学制は従来小学校（6～10）と中学（11～15）であるが，これを再編しようというものである。しかしこれは日本の学校制度と比較すると必ずしも十分なものではない。

イタリアの学校改革に関する法律は以下の通りである。

① 国家及び行政改革と学校自治
法律 59 号 (1997.3)，法令 112 号 (1998.3)，法律 440 号 (1997.12)，法令 59 号 (1998.3)，省令 251 号 (1998.5)，大統領令 233 号 (1998.6)，省令 179 号 (1999.7)，省令 234 号 (2000.6)

② 義務教育
法律 9 号 (1999.1)，省令 323 号 (1999.8)，省令 70 号 (2000.3)

③ 職業教育と義務教育の再編
法律 196 号 (1997.1)，法律 144 号 (1999.5)，大統領令 257 号 (2000.7)

④ 新国家試験
法律 425 (1997.12)，大統領令 323 号 (1998.7)

⑤ 学校制度再編
法律 30 号 (2000.2)，法律の段階的 5 ヵ年実施計画

⑥ 教育改革の実施計画
国会議決 6—00155 (2000.12)，上院議決⑥—00057 (2000.12)

次に学校制度改革の内容をもっと詳細に見ていく。最初の幼年学校（3～6 歳）は日本の幼稚園にあたり，日本と同じく義務教育ではなく任意とした。次の基礎学校は初等教育段階の小学校に該当する。6～13 歳までの発達段階に適合させるため多様な教育がなされなければならない。7 年間のサイクルは基礎学力とバランスのとれた人格形成がはかられる。そして第 3 段階

として中学校と義務教育の終了がある。基礎サイクルの小学校に加え第2サイクルは基礎学力をさらに強化し増大させ素質や適性を伸張させ教養ある人間形成をはかる。但し，ここでは義務教育は15才で完了する。さらに大学もしくは実社会に巣立つための基礎能力を伸張する。生徒は4領域12の方針の中から自分の進路を選択し，第2のサイクルの5年課程リチェーオ(Liceo)で進路を決定していくのである。最初の2年間なら進路の変更が可能だが，それ以後は変更できない。そして義務教育終了の証明書が交付される。15歳で義務教育を終了し，その後の進路は5年間なのでリチューオに進学し国家試験を受けるか，あるいは職業教育の分野に進む。この職業教育は仕事見習（徒弟奉公）等々柔軟なシステムで運営される。

学校改革再編のための法律第30号は前述したごとく2000年12月12日と21日にイタリア国会の議会と上院により可決され，5ヵ年計画の基本的な柱は学科課程再編のための一般基準として幼年期・基礎学校・中学校の区分と，それらの担当教員の再資格付与の基準及びその財政的調整の問題等が考えられ，同時にそれらの柱は実現の可能性や各目標に対する妥当性，さらには不足の財政負担等の問題等が相関的に考えられる。

学校改革の漸進新的計画実施予定表は参考資料Iに提示する。改革は2001／2002年度から開始され2007／2008年度で終了する。2012年度には新課程による次段階の計画が予定されている。

V. イタリアの情報教育

日本においては平成14年度から教育内容の厳選と「総合的な学習」等を中核とする新学習指導要領が小・中学校において実施され，15年から高校も実施される。日本では約10年毎に教育内容の国家基準が学習指導要領として改訂され実践されてきている。平成元年に告示され翌年から実施されてきた学習指導要領で情報化への対応が大きな柱の一つとして盛り込まれ実践されてきた。そこには10年間の情報教育の在り方の反省と展望が当然盛り込まれた。情報教育の内容・情報手段の活用・コンピュータ等の条件整備のための具体的諸方策が，この10年間の実績として実践されてきたのである。

平成3年7月に刊行された文部省（現文部科学省）の『情報教育に関する手引き』によれば，情報教育の目的は以下の4つの情報活用能力を身につけさせることにあった。

学習指導要領と情報活用能力

1. 報の判断，選択，整理，処理能力及び新たな情報の創造能力の育成
2. 情報社会の特質，情報化社会や人間に対する影響の理解
3. 情報の重要性の認識，情報に対する責任感
4. 情報科学の基礎及び情報手段の特徴

情報化社会においては何よりも時代精神に即応した教育が実践されなければならない。しかしながら科学技術の時代では不易流行の時代推移も流行のみに押し流される弱さがある。極度の科学技術は不要かつ反社会的商品をも発明し，コマーシャルリズムにのせてしまうことが少なくない。遊びとしてのコンピュータのゲームが悪影響を及ぼしたりすることがある。このことは人間が対象にどう対応するかの基本姿勢にかかわってくる。常時どこでも正しい判断ができるとは限らない。経済的に生活が豊かになればなるほど人間の心は貧困になりかねない。耐え忍ぶ必要がなくなり何時でもイージーに流れてしまう危険性がある。

このような生活を繰り返していると「やらなければならないこと」を回避して善悪の判断も消失してしまう。例えば，学習内容をここまで確実に身につけなければならない場合にいい加減に学習してしまう。その結果わけのわからぬものとなる。この積み重ねがどうなるかは十分見通しがつく。善悪の判断がつかずイージーに流れて学習していく態度が日本の情報教育のマ

イナス面に「影」の部分として，この10年間少なからず重大な課題を残している。

情報教育の「影」の部分は，情報過多によるvirtual realityの出現であり，タテマエとしての効果がマイナスに特出してきた結果である。直接経験の欠如は社会生活のあらゆる面で悪い結果を招いている。また情報偏向が生じ自分の好悪のみで決定してしまい負になることはすべて避けてしまう。学習でプラスとマイナスの内容を十分身につけなければならないのにしない。偏った知識の持ち主が成人社会で多くの害毒を流している。特定の情報依存や情報災害，さらには情報犯罪が毎日多数いやと言うほど日本の社会において起こっている。

以上我が国の情報教育の歩みを10年ふりかえってみたが果たしてイタリアはどうであろうか。

研究先のローマ第三大学 (UNIVERSITA DEGLL STUDI ROMA) を訪問し多くのことを考えさせられた。

サンドラ教授担当の教育学概論 PEDAGOGIA GENERALE の受講者の最終試験に立ち会ったが，約50分間にわたり学習してきた内容の隅から隅までを教授は質問した。学生は教科書はもちろんのことノートにいたるまで多方面にわたり質問を受ける。ここでは情報そのものの学習内容の定着状況が問われ，次いで発展段階としてそれらの内容の応用力が質問される。1対1の面接なので逃げようがない。

サンドラ教授の授業要項は参考資料IIに提示する。

ローマ第三大学は現場からの派遣教員が研究に来ており1~2年の研修及び研究をして現場に戻るシステムに成っている。日本の現場派遣制度と非常によく類似している。所属校に勤務しながら何日かを大学での研修に費やしたりする。研修内容は大学院の学生が学ぶような純粋理論ではなく，教育現場と密接な教授法や教育経営管理の裏づけ理論である。研修終了後は大半が指導主事や教頭・校長等の管理職につくとのことである。選ばれたエリート教員だけあって大学に20台ほどあるパソコンは皆よく利用していたが，必ずしも十分な保有台数ではない。彼らはE-mail (tirocinio@uniroma③.It) を持っている。コラド・デリオリオは年配の男性教員で日本語も多少話せる有望な校長候補。パトリッィア・ヅッケッタは年長のベテラン女教師，リジア・アチアロリーは絵の上手な頭の切れる女教師，ジョバンナ・メリーナは明朗な教え方の上手な女性教師，ティッアナ・セロニーは一番若く活発な女教師。まだほかに5名ほどいるそうだが，当日会って意見交換ができたのはこの5名であった。皆そろって日本の教育界のメディア活用や情報教育に多大の関心を示していたのが印象的であった。

サンドラ教授の講義内容は参考資料IIの通りだが日本の大学に比べると格段程度が高いわけではない。敢えて比較すれば本当に学習したかの実質内容が個別に問われているかどうかである。日本の場合は形式上済ませればよいと言う傾向が強い。

ローマ第三大学は他にポリチリニコ校もあり，そこのコンピュータ部門責任者のロベルトにも会ったが，コンピュータの台数は全部で20台足らずで全く不十分だと嘆いていた。日本と比べもの物にならないほど少ない。しかし，台数は少ないものの稼働率は高いという。ローマ大学は分校がローマ市内にいくつもあり，学部ごとに所在が異なっている。地下鉄B線に大方散在している。

最後にイタリア国立大学の住所一覧表を参考資料」として示しておく。＊印が訪問した大学だが，夏期休暇中でもあり責任者に会えないところが多かった。イタリアのバカンス期間は全く無人の所が多いのに驚いた。

平成13年7月1日より3ヶ月間の短期在外期間中滞在した先はVia Vincenzo Troya. n. 26/ A int. 11 Roma ITALY でローマの中心部より西部にあたる住宅街であった。近くに小・中・高校もあり，訪問してみたが夏休み中のこともあり，校舎を見るだけだった。

但しローマ東部 NO 第 73 小学校 (DELIGENTE SCOLASTICO 73° CIRCOLD DIDATTICO) に校長モリテルニ・パスクワーレ (Prof. Dr. MORITERNI PASQUALE) 氏を訪問。1 日中イタリアの教育現場に触れることができた。引率してくれたサンドラ教授は大規模校だと言っていたが，日本に比べると中ないし小規模校である。但し，幼・小・中・がひとつの校地内にあるので大規模校と呼んでいたことが後でわかった。1 学級は 20～25 名規模で，児童らは皆あかるく歓迎してくれた。肝心の情報教育の施設面ではコンピュータは事務室にあるのみで教室にはない。その意味ではコンピュータを利用した教育は，大変少ないと言ってもよいだろう。

VI. イタリア教育雑感

フルブライト奨学生としてイリノイ大学大学院で教育工学の先駆をなすプログラム学習を学んだのは今から 38 年前のことである。当時アメリカやイギリスと並んでプログラム学習研究が盛んだったのがイタリアであった。イリノイ大学の研究助手時代の同僚にイタリア人院生が居り，その後の研究にひそかに興味を抱いていたのもイタリア在外研究を選んだ理由だった。

今回はからずも 3 ヶ月という短期間ながらもイタリアへの在外研究のチャンスに恵まれ，ローマ大学及びペルージャ大学での研究の機会が与えられた。プログラム学習は，その後，教育工学として革新的研究の方向を辿り教育研究の領域でも確実な市民権を得ることになった。米英はもちろんのことロシア・ベルギー等ヨーロッパ各国でもコンピュータを土台に益々発展の度合を増していった。科学技術の高度化は当然コンピュータの教育利用を促進させ IT 革命として生活に定着するようになった。同時に，その結果コンピュータ利用の影の部分が犯罪や反社会的結果を招き，又新しい社会問題を惹起しているのが現状である。

今回イタリアでのテーマに関する研究を掲げていったが正直なところハード面での技術レベルは予想外に低次のものであった。しかし，それはコンピュータを使って情報教育を外面上すれば良いと言うものではないことがわかった。つまり教育次元で単に機器利用のみでヨシとすることが絶対的であるかという問いかけである。学校教育では発達段階上の課題もあろう。日本に見られるコンピュータゲームのみの感覚で教育的に利用すればよいものかどうか。ゲーム感覚は面白く興味を喚起できることもあろうが，実は，それは必ずしも正しいと言うものではない。予算面で金をかけさえすればよいものではない。機器を使わない（コンピュータ未使用）教育も必要であることを気づかせてくれたことは今回の研究視察の大きなメリットと思われる。

急な坂を重い大きなボールが転げ落ちるのを止められぬような時代の後押しが日本では IT 革命の嵐として吹きまくっている。すでに携帯電話の便利さの裏にひそむ急務の問題が提出されている。ローマ市内でも各所にパソコン利用センターが在り安価で利用できる。もし各人が日本のように安価にパソコンを購入できるなら，イタリアのパソコンセンターは廃業するに違いない。

情報化社会が世界各国に到来して段階的に区分を作りつつある。これらは間違いなく国家の経済的実力と対応する。それゆえ経済大国は IT 革命が可能だが，そうでない国は不可と言っていいかどうか問題である。しかし，これからの情報化社会では，むしろ先進国の課題を十分見極めた結果を踏まえて情報教育を推進することも必要であろう。ハードを導入すればこと足れりとする形式化に対する警鐘にも聞こえる。

サンドラ教授と国立中央図書館 (Bibliteca nazionale centrale di Roma) を訪れたが，残念ながら国際的に利用できる情報が少なかった。つまり日本語による文献はもちろんのこと英語版も殆どなかった。ただ E-mail があり世界どこからでも最小必要限の情報は入手できると言う

（ホームページ；http://shnenline.shn.it/）。

おわりに

イタリアの夏は暑い。特に7月8月は殆ど雨は降らない。日本ほど蒸し暑くはないが，バスや地下鉄・更には国鉄の列車の大部分は日本と違い冷房はない。冷房車はあっても少数である。市内あらゆるところに水のみ泉水がある。馴れない旅行者は気になるがイタリア人は平気で街路の水のみ場の水を飲む。水は意外と冷たく美味しく感じる。馴れるとなんとも思わないから，生活すると言う習慣を身につけることは大切である。イタリア人の明るいボンジョルノ Buongiorno やグラーツェ Grazie，アッリヴェデルチ Arrivederci は誠に気持ちのよいものである。最近の日本人は，これらの,今日は，ありがとう，さようならの挨拶すら忘れてしまっているように感ずる。チャオ Ciao などはまさに親しさあふれる人間関係の挨拶である。わずか3ヶ月滞在の短期間だったが得るものが多かった。

在外研究では資料収集もさることながら地元の人々に遭遇し，相互に理解しあいながら新しい人間関係を築くことが重要である。旅行は1回限りで終了するが研究には終わりはない。むしろ人と知り合うことが出発であり，これからが本格的研究のスタートと言える。

イタリアで知遇を得たイタリア大学関係者を始めとする多くの人々に厚く感謝申し上げたい。特に今回の在外研究に関しては日本のピノキオ研究の第一人者の青山学院女子短期大学教授の前之園幸一郎先生には大変お世話になった。紙上を借りて厚くお礼申し上げたい。その他，イタリア関係の出版社の「文流」社長の西村暢夫氏には数々の資料のヒントを提供していただいた。これまた感謝申し上げる。また在伊留学をした本学外国学部奥田宏子教授にアドバイスもいただいた。資料は必ずしも十分に収集できなかったが，情報教育に関する人間教育の原点を考えさせてくれた点で多大の収穫を得られたと実感している。

勤続30年余に及びこのようにチャンスに恵まれたことに関し，神奈川大学に感謝をささげたい。終わりに在伊中何かと moral support を与えていただいたサンドラ教授に厚くお礼を申し上げたい。

参考文献

1. Touring Club of Italy『ITALY』2001
2. 藤沢道郎『物語イタリアの歴史』2001　中公新書
3. F.ゲイッチアルディーニ『イタリア史』2001，太陽出版　末吉孝州訳
4. ダイアモンド社『イタリア留学 2001～2002』
5. 文部省『情報教育に関する手引き』平成3年
6. 日本教育工学振興会『コンピュータを教育に生かす』平成12年
7. 小池榮一「情報教育の基礎」1995年第14号
8. 小池榮一「情報教育とコンピュータ」1997年第16号
9. 小池榮一「情報教育研究の基礎要件」1998年第17号
   ＊7～9は神奈川大学心理・教育研究論集
10. 小池榮一『教育工学の現代的課題』1991年，酒井書店

参考資料Ⅰ　学校改革の漸進的計画表

ETA'	2001/2002	2002/2003	2003/2004	2004/2005	2005/2006	2006/2007	2007/2008
6	1A	1A	1A	1A	1A	1A	1A
7	2A	2A	2A	2A	2A	2A	2A
8	3B	3A	3A	3A	3A	3A	3A
9	4B	4B	4A	4A	4A	4A	4A
10	5B	5B	5B	5A	5A	5A	5A
11	1C	1C	1C	1C	6A	6A	6A
12	2C	2C	2C	2C	2C	7A	7A
13	3C	3C	3C	3C	2C	3C	1D (7A+3C)
14	1E	1D	1D	1D	1D	1D	2D
15	2E	2E	2D	2D	2D	2D	3D
16	3E	3E	3E	3D	3D	3D	4D
17	4E	4E	4E	4E	4D	4D	5D
18	5E	5E	5E	5E	5E	5D	=

A = Nuovi curricoli CICLO DI BASE
B = Curricoli attuali scuola elementare
C = Curricoli attuali scuola media
D = Nuovi currcoli CICLO SECONDARIO
E = Curricoli attuali secondaria superiore

A＝新しい課程：基礎サイクル
B＝現行の小学校課程
C＝現行の中学校課程
D＝新しい課程：第２のサイクル
E＝現行の高校の課程
註　ETA' は年齢を示す。

参考資料 II　サンドラ教授の授業要項

PEDAGOGIA GENERALE
II Biennio
Prof. Sandra Chistolini

Secondo semestre

Argomento del corso: Identità delle scienze pedagogiche e comunicazione interdisciplinare.
Il corso è riolto a studenti e studentesse che sostengono il terzo esame di Pedagogia generale. Predendo spuno dalla riflessione teoretica e pratica sviluppata negli anni precedenti, si cercherà di ricondurre la sperimentata differenziazione pedagogica entro un quadro interpretativo generale nel quale i singoli contributi acquistano significato umano e completezza scientifica. Le scienze pedagogiche si caratterizzano per la molteplicità degli apporti che potenziano, senza frammentarlo, il discorso unitario di base. Si tratta di maturare una sempre maggiore consapevolezza di tale evidenza che possiamo dimostrare sia nell'argomentazione, con concetti e proposizioni, sia nella prassi educativa quotidiana. L'analisi del rapporto intra-istituzionale dell'essere scuola rilancia l'impegno degli insegnanti ad educare le giovani generazioni ai valiri, a partire dal conseguimento di metodoligie d'intervento capaci di elaborare la coerenza necessaria tra il pensiero pedagogico e l'agire educativo.
Nel laboratorio saranno offerte possibilità di analisi critica dell'insegnamento sia come offerta e conquista di saperi multimediali, sia come valutazione e autovalutazione della professionalità docente in atto.

Testi d'esame:
CORRADINI L., CATTANEO P., *Educazione alla salute*, 1997, Brescia, La Scuola;
LAENG M., BALLANTI G., *Pedagogia*, 2000, Brescia, La Scuola.

Modalità d'esame: orale

参考資料 III　イタリア国立大学住所一覧

（＊印は訪問大学）

	学校名	欧文名称と所在地
	アンコーナ大学	**Università degli studi di Ancona** Piazza Roma 22. 60100 Ancona. Italia
	バーリ大学	**Università degli studi di Bari** Palazzo Ateneo-Piazza Umberto 1. 70122 Bari. Italia
	バジリカータ大学	**Università degli studi di Basilicata** Via Nazario Sauro 85. 85100 Potenza. Italia
	ベルガモ大学	**Università degli studi di Bergamo** Via Salvecchio 19. 24129 Bergano. Italia
＊	ボローニャ大学	**Università degli studi di Bologna** Via Zamboni 33. 40126 Bologna. Italia
	ブレーシャ大学	**Università degli studi di Brescia** Piazza del Mercato 15. 25121 Brescia. Italia
	カリアリ大学	**Università degli studi di Cagliari** Via Università 40. 09100 Caggliari. Sardegna. Italia
	カラブリア大学	**Università degli studi di Calabria** Via G. Brodolini. pal Fabino. 87030 Commenda dà Rende. Italia
	カメリーノ大学	**Università degli studi di Camerino** Via del Bastione. 62032 Camerino. Italia
	カッシーノ大学	**Università degli studi di Cassino** Via G. Marconi 10. 03043 Cassino (Frosinone). Italia
	カターニャ大学	**Università degli studi di Catania** Piazza Università 2. 95124 Catania. Italia
	フェラーラ大学	**Università degli studi di Ferrara** Via Saonarola 9. 44100 Ferrara. Italia
＊	フィレンツェ大学	**Università degli studi di Firenze** Piazza San Marco 4. 50121 Firenze. Italia
＊	ジェノヴァ大学	**Università degli studi di Genova** Via Balbi 5. 16126 Genova. Italia
	ラクイラ大学	**Università degli studi dell'Aquila** Piazza Vincenzo Rivera 1. 67100 L'Aquila. Italia
	レッチェ大学	**Università degli studi di Lecce** Viale Gallipoli 49. 73100 Lecce. Italia
	マチェラータ大学	**Università degli studi di Macerata** Piaggia Uniersità 2. 62100 Macerata. Italia
	メッシーナ大学	**Università degli studi di Messina** Piazza Salatore Pugliati 1. 98122 Messina. Italia
＊	ミラノ大学	**Università degli studi di Milano** Via Festa del Perdono 7. 20122 Milano. Italia
	モデナ大学	**Università degli studi di Modena** Via Uniersità 4. 41100 Modena. Italia
	モリーゼ大学	**Università degli studi di Molise** Via Manzoni Alessandro. 86100 Campobasso. Italia
	ナポリ大学	**Università degli studi di Napoli** Corso Umberto 1. 80138 Napoli. Italia
	パドヴァ大学	**Università degli studi di Padova** Via 8 Febbraio 2. 35122 Padova. Italia

	学校名	欧文名称と所在地
	トリエステ大学	**Università degli studi di Trieste** Piazzale Europa 1. 34127 Trieste. Italia
	トゥーシャ大学	**Università degli studi di Tuscia** Via S. Gioanni Decollato 1. 01100 Viterbo. Italia
	ウーディネ大学	**Università degli studi di Udine** Via Palladio 8. 33100 Udine. Italia
	ウルビーノ大学	**Università degli studi di Urbino** Via Saffi 2. 61029 Urbino. Italia
＊	ヴェネツィア大学	**Università degli studi di Venezia** Dorsoduro 3426. Ca'Foscari. 30123 Venezia. Italia
	ヴェローナ大学	**Università degli studi di Verona** Via dell'Artigliere 8. 37129 Verona. Italia
	ミラノ工科大学	**Politecnico di Milano** Piazza Leonardo da Vinci 32. 20133 MIlano. Italia
	トリノ工科大学	**Politecnico di Torino** Corso Duca degli Abruzzi 24. 10129 Torino. Italia
	パレルモ大学	**Università degli studi di Palermo** Palazzo Steri Piazza Marinà 61. 90133 Palermo. Italia
	パルマ大学	**Università degli studi di Parma** Via dell'Uniersità 12. 43100 Parma. Italia
	パヴィア大学	**Università degli studi di Pavia** Strada Nuova 65. 27100 Pavia. Italia
＊	ペルージャ大学	**Università degli studi di Perugia** Piazza dell'Università. 06123 Perugia. Italia
＊	ピサ大学	**Università degli studi di Pisa** Lungarno Pacinotti 43/44. 56100 Pisa. Italia
	レッジョ・カラブリア大学	**Università degli studi di Reggio Calabria** Via Zecca 4. 89125 Reggio Calabria. Italia
＊	ローマ大学 「ラ・サピエンツァ」	**Università degli studi di Roma "La Sapienza"** Piazzale Aldo Moro 5. 00185 Roma. Italia
＊	ローマ大学 「トール・ヴェルガータ」	**Università degli studi di Roma "La Vergata"** Via Orazio Raimondo. 00173 Roma. Italia
	サレルノ大学	**Università degli studi di Salerno** Via Ponte don Melillo. 84084 Fisciano (Salerno). Italia
	サッサリ大学	**Università degli studi di Sassari** Piazza Università. 07100 Sassari. Sardegna. Italia
＊	シエナ大学	**Università degli studi di Siena** Banchi di Sotto 55. 53100 Siena. Italia
	トリノ大学	**Università degli studi di Torino** Via Verdi 8. 10124 TOrino. Italia
	トレント大学	**Università degli studi di Trento** Via Belenzani 12. 38100 Trento. Italia

参考資料IV　写真資料

①ローマ大学

②サンドラ教授

③現場派遣学生とローマ大学

④チルコルド小学校長
パスクワーレ